

グローバルデザイン提案書:北海道東川町

綿貫 雅一*

【概要】

北海道のほぼ中央に位置する東川町は、人口約8,600人の町で、美しい自然環境と豊かな観光資源に恵まれています。旭川市中心部から約13km、旭川空港から約7kmと交通アクセスも良好です。町東部は山岳地帯で、大規模な森林地域を形成しています。この地域には、北海道最高峰の旭岳を主峰とする日本最大の自然公園「大雪山国立公園」が含まれています。

大雪山の雪解け水は長い年月を経て地下水となり、麓の町まで供給されるため、東川町は北海道で唯一、全国的にも珍しい上水道のない町として知られています。また、「写真の町」「写真文化首都」を宣言し、写真を通じたまちづくり

を積極的に推進しています。近年、全国からの移住者増加に伴い、カフェや雑貨店、ワイナリー、ヴィンヤード、日本酒蔵などが増え、若い世代の観光客も増加しています。

東川町は、本物志向の「東川スタイル」という独自の文化を持つユニークな町です。外国人も多く、国内では珍しい多様性（ダイバーシティ）の高い町でもあります。「適疎」という基本理念のもと、将来を見据えた地域創生の視点でまちづくりを推進しています。さらに、地域の独特な風土と豊かな地域資源を活かした革新的な取り組みを行う、未来に挑戦する先進的な町です。

1. 基本情報

(1) 地理・気候

東川町は、北海道上川総合振興局に属する町の一つで、面積は247.30 km²です¹⁾。東は北鎮岳（2,244m）で上川町と接し、南には忠別川を挟んで美瑛町と東神楽町、北西には岐登牛山に沿って旭川市と接しています。町の面積の約70%は森林が占め、特に東部は山岳地帯で大

規模な森林地域を形成しています。この地域には、北海道最高峰の旭岳（2,291m）を含む日本最大の山岳公園である大雪山国立公園（面積2,267.64 km²）の一部が含まれています²⁾。南西部には忠別川と倉沼川によって形成された扇状地が広がり、平坦部は水田地帯、東部の山麓は畑地帯として利用されています。

* 一般社団法人 日本グローバル・イニシアティブ協会 理事長

1) 北海道上川総合振興局。https://www.kamikawa.pref.hokkaido.lg.jp/

2) 環境省。https://www.env.go.jp/park/daisetsu/index.html

図1 東川町の位置



(<https://higashikawa-town.jp/portal/machi/panel/4>)

東川町の自然・地理的概況は、次の通りです。

- ・ 山：旭岳、熊ヶ岳、当麻岳、安足間岳、比布岳、鋸岳、北鎮岳、中岳、間宮岳、北海岳、江卸山
- ・ 河川：忠別川、倉沼川、幌倉沼川、ポン倉沼川、サルン倉沼川
- ・ 滝：羽衣の滝、敷島の滝
- ・ 池沼・湖沼：三ノ沼、大沼、小沼、瓢沼、姿見の池、夫婦池、湯の沼、忠別湖（忠別ダム）

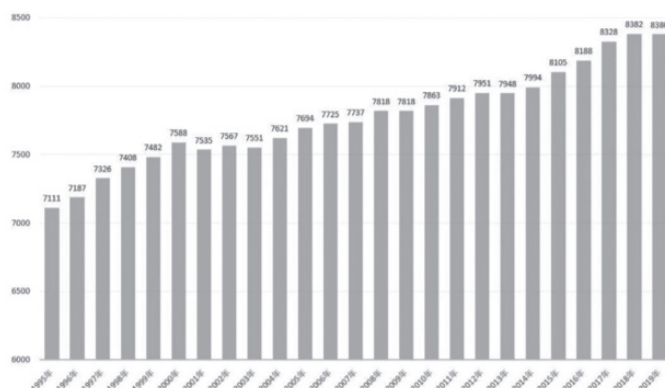
ケッペンの気候区分によると、東川町は湿

潤大陸性気候に属します。南部の標高約210mから北部の三本槍岳山頂の1,917mまでの約1,700mの標高差があり、寒暖の差が大きいのが特徴です。冬季は寒冷で降雪量が多く、特別豪雪地帯に指定されています。冬季には-25℃前後の気温が観測されることもあり、厳しい冬を迎えます。年間の降水量は1,500～2,000ミリメートルで、夏季に降水量が多く、冬季には少ない傾向があります。

(2) 人口・世帯数及び人口推計

令和5年（2023年）2月末時点での東川町の人口は8,589人、世帯数は4,246世帯です³⁾。人口は昭和25年（1950年）の10,754人をピークに、その後は都市部への流出により減少しました。平成5年（1993年）には6,973人にまで落ち込みましたが、1995年からの大規模な宅地造成や交通アクセスの改善により、人口は再び増加に転じました。特に、平成26年（2015年）には人口が8,000人を超え、2020年には8,437人と4.1%の増加を見せています⁴⁾。

図2 東川町の人口の推移（1995－2019）



出典：東川町人口動態調査 (<https://higashikawa-town.jp/portal/machi/panel/89>)

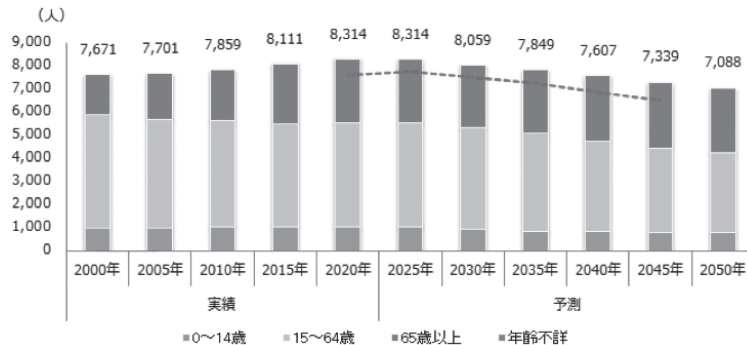
3) 北海道人口動態及び世帯数調査。令和5年2月末。

4) 東川町 町の紹介。 <https://higashikawa-town.jp/portal/machi>

将来の人口推計では、2020年の総人口8,314人がピークとされ、2040年には7,607人、2050年には7,100人を下回ると予測されています。

これらの推計は総務省や国立社会保障・人口問題研究所のデータに基づいています。

図3 東川町の将来人口推計（2000－2050）



（出典：国立社会保障・人口問題研究所『日本の地域別将来推計人口』：令和2(2020)年推計）

（2）東川町の革新的取組み

東川町は、全国でも珍しいユニークな取り組みを実施しています。

- ・ 写真の町：1985年に「写真の町」を宣言し、2014年には「写真文化首都」を宣言しました。写真の映りのよい、世界に開かれた町づくりを目指しています。毎年夏には国際写真フェスティバルが開催され、多くの来場者を集めています。
- ・ ひがしかわ株主制度⁵⁾：町を応援したい人が寄付を通じて「株主」となり、まちづくりに参加できる制度です。寄付はふるさと納税として税法上の控除対象となり、特別町民認定や宿泊優待などの特典が付与されます。

- ・ 東川オフィシャルパートナー制度：2019年に開始されたこの制度は、東川町とつながりのある企業とのパートナーシップを構築し、地域、日本、そして世界の未来を育む社会価値の共創を目指しています。
- ・ 地域通貨「HUC（ひがしかわユニバーサルクーポン）」：2017年に導入された地域通貨で、町の商工会が発行し、町内約110の事業者で利用できます。導入後、カード使用量は5倍に増加し、経済効果は半年で約2億2千万円と試算されています。
- ・ 地域おこし協力隊⁶⁾：地域の若者と連携し多くの人々とともに、まちづくりを進めるとともに、将来的な定住人口の増加を視野

5) 東川町ひがしかわ株主制度とは。 <https://higashikawa-town.jp/kabunushi/about>

6) 地域おこし協力隊は、2009年度に総務省によって設立された制度で、過疎や高齢化が進む地方で地域外の人材を受け入れ、地域の活性化を目指します。活動内容は地域ブランドの開発、農林水産業への従事、住民支援などが含まれ、地域貢献を志す都市住民のニーズに応え、地域力の維持・強化を図ります。隊員は各自治体から委嘱され、任期は1年から3年です。総務省は隊員1人当たり480万円の経費を支援し、活動は年々増加。2015年度には2,625人、2018年度には5,530人、令和4年度には6,447人が参加しており、令和8年度までに10,000人を目指しています。

に活用をすすめ、地域力の維持・強化を図っています。

図4 地域おこし協力隊の比較（2020年度）

地域おこし協力隊の人数			
		20年度	19年度比
①	東川町	50	7
②	ニセコ町	23	9
③	三笠市	17	5
③	上士幌町	17	5
③	新得町	17	7
⑥	厚真町	14	▲1
⑦	上川町	12	1
⑧	士別市	11	0
⑨	利尻町	10	0
⑩	北見市	9	▲1
⑩	美唄市	9	2
⑩	紋別市	9	0
⑩	砂川市	9	▲1
⑩	沼田町	9	1
⑩	中川町	9	▲1

(注) 単位人、▲はマイナス

(出典：日経データで読む地域再生) 7)

- ・移住体験⁹⁾：東川町では、最短3ヶ月から最長1年間の移住体験を提供しています。自然豊かな環境での生活や趣味を通じて、町の魅力を体感できます。
- ・KUAGU デザインコンペ⁹⁾：国際的な建築家 隈研吾氏との連携によるデザインコンペです。次世代の丁寧な暮らしの提案を目指し、世界中の若者を対象に実施されます。このように、東川町は独自の文化や取り組み

を通じて、地域活性化を図っています。今後も地域資源を活用した革新的な取り組みを継続していくことが期待されます。

2. 経済・ビジネス

(1) 地域経済の概況

RESASの生産分析によれば、東川町の2018年の生産額は448億円です。その内訳は、第1次産業（農業）が71.7億円（16.0%）、第2次産業が182.7億円（40.8%）、第3次産業が194.0億円（43.3%）となっています。第2次産業では、その他の製造業が42.8%、建設業が34.5%、食料品が7.6%の比重を占めています。一方、第3次産業では、保健衛生・社会事業（14.2%）、公務（13.6%）、宿泊・飲食サービス業（13.4%）、教育（12.9%）、住宅賃貸業（12.3%）など、幅広い部門が寄与しています¹⁰⁾。

東川町の地域経済は拡大傾向にあり、企業数は2009年の233から2016年には279に増加しました。同様に、事業所数も2009年の285から2016年には327事業所に拡大しています。従業員数を見ると、2016年の全産業での雇用者数は2,133人で、産業別では製造業が約三分の一の729人を雇用しています。次いで、卸売業・小売業312人、農業・林業272人、宿泊業・飲食サービス業248人、医療・福祉178人となっています。

7) 日本経済新聞 東川町の「移住公務員」全国1位、定住への流れ確立 2021年7月30日。

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOFC298SR0Z20C21A7000000/>

8) 東川町 町に住む 移住体験。 <https://higashikawa-town.jp/portal/sumu/panel/39>

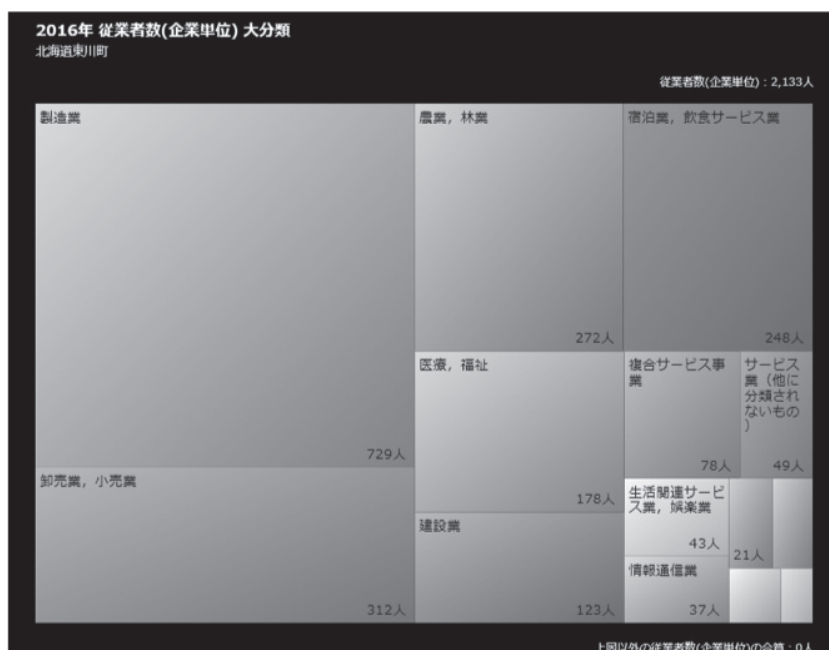
9) 「隈研吾&東川町」KAGU デザインコンペ。 <https://www.kagu-higashikawa.jp/>

10) RESAS 地域経済循環マップ「生産分析 産業分類」

図 5 東川町の生産額内訳（2018 年）



図 6 東川町の従業員者数内訳（2016 年）



(2) 農業

農業は東川町の主要な産業の一つであり、以下の特徴があります。

道内有数の米どころ

東川町は大雪山国立公園の麓に位置し、大雪山

系の清水が豊富に注ぐ道内随一の米どころです。東川米ブランドを確立し、「ななつぼし」や「ゆめぴりか」といった品種は特Aランクを取得しています。

野菜の多様性

冷涼な気候、大雪山の清流、肥沃な土壌を活かして、季節ごとに高原野菜などの豊富な農産物を生産しています。また農業生産者は有機農法や減農薬栽培に取り組み、地元産の安全で健康的な野菜の提供にも注力しています。

農業データ

2020年の農林業センサスによれば、耕地面積は3,550ha、農業就業人口は394人です。農業経営体数は2005年の397から減少し、2020年には192経営体に縮小しています。その中で、ほとんどが個人経営体（172経営体）です。また、総農家数は297戸、販売農家数は172戸です¹¹⁾。

経営体当たりの耕地面積は18.1haで、全国

平均の3.05haの約6倍ですが、北海道平均の30.2haの約6割の規模です。また、経営耕地面積規模別では、1ha以下の零細農家が全体の17.7%を占め、1ha以上10ha未満の農家が30.2%（全国：1ha以上10ha未満 42.3%）を占めています。一方、10ha以上50ha未満の農家は34.7%、50ha以上の大規模経営農家は4.2%です¹²⁾。

東川町の農業産出額は445千万円で、地域生産額の10%を占めています。主力の米（271千万円）と野菜（175千万円）は、この2種類で地域農業産出額の98%を占めています¹³⁾。

2020年の品目別農業産出額は以下の通りです。

図7 東川町の品目別農業産出額（2020年）



11) 農林水産省「わがマチ・わがムラ 市町村の姿 グラフと統計で見る農林水産業 基本データ 北海道東川町」。
<https://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/01/458/index.html>

12) RESAS 産業構造マップ「農業 農地分析」。

13) RESAS 産業構造マップ「品目別 農業産出額」。

(3) 観光業

東川町は北海道のほぼ中央に位置する美しい観光地です。主な魅力は以下の通りです。

- ・雄大な自然：東川町は大雪山国立公園に抱かれ、雄大な自然に囲まれています。大雪山をはじめとする山々、渓谷、湖沼、温泉など、多様な観光資源を有し、四季折々の美しい景観を楽しむことができます。
- ・温泉：旭岳温泉と天人峡温泉の二つの温泉地があります。豊かな自然の中でゆったりと温泉を楽しむことができ、日頃の疲れを癒すのに最適です。それぞれの温泉地で泉質も異なり、様々な温泉旅館や施設が点在しています。
- ・アウトドアアクティビティ：登山、ハイキング、キャンプ、釣り、スキー、スノーボードなど、様々なアウトドアアクティビティを楽しむことができます。大自然を満喫できる最適な環境が整っています。
- ・文化と伝統：東川町は豊かな文化と伝統を継承しています。地域の祭りや伝統行事が数多く開催され、地元の人々の温かいおもてなしに触れることができます。また、特産品や伝統工芸品の販売を通して、東川町の文化に触れることもできます。
- ・星空観測：人口が少ないため光害が少なく、夜空は息を呑むほど美しいです。クリアな空気と美しい景観の中で、満天の星を楽しむことができます。星空観測イベントや天体観測ツアーも開催されています。

東川町の観光統計は北海道上川総合振興局（上

川管内）が集計しています。東川町は上川中部地域に属し、観光入込客数は旭川市を除く上川管内の8.5%から9.0%を占めています。近年の観光入込客数の推移は以下の通りです。

- ・平成27年度（2015年度）：134万1,400人
- ・平成29年度（2017年度）：148万8,800人（ピーク）
- ・令和元年度（2019年度）：114万900人（前年度比約20%減）

平成27年度から平成29年度にかけて増加傾向にありましたが、その後は減少傾向にあります¹⁴⁾。令和元年度の減少について、上川総合振興局は以下のように分析しています。

観光施設への入込は概ね好調でしたが、冬季の積雪量が少なかったため、スキー場の営業日が短縮されました。また、新型コロナウイルス感染症の影響で、3月の来客が減少し、大型宿泊施設の長期休業も入込客数減少の要因となりました。（上川管内観光入込客数調査報告、令和2年、p.13）

令和元年度（2019年度）の観光入込客数114万900人の内訳は以下の通りです。

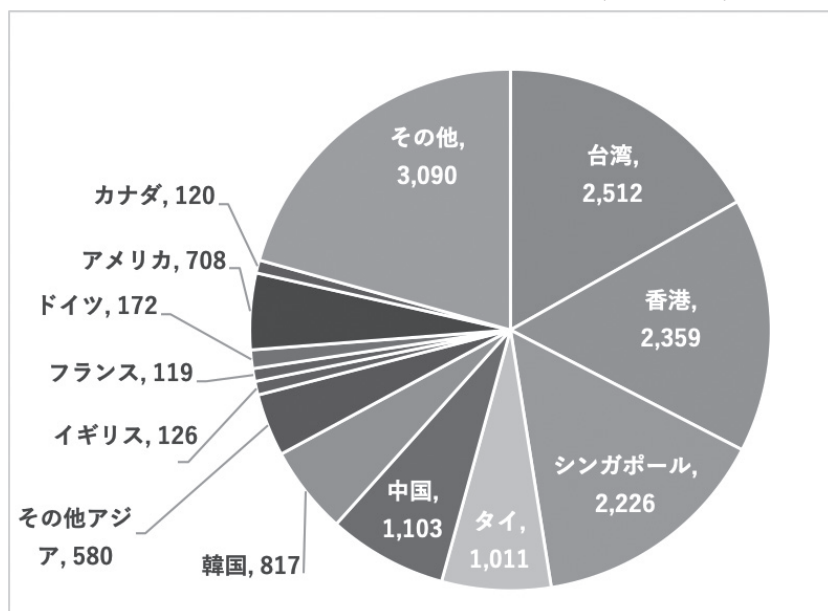
- ・道内客：96万100人（全体の約85%）
 - ・道外客：18万800人（全体の約15%）
 - ・日帰り客：105万5,800人（全体の約90%以上）
 - ・宿泊客：8万5,100人（全体の約10%未満）
- 令和元年度（2019年度）の外国人宿泊者数は1万4,943人で、その内訳は以下の通りです。
- ・アジア圏：1万618人（全体の約70%）
 - 台湾：2,512人
 - 香港：2,359人

14) 北海道上川管内総合振興局「上川管内観光入込客数調査報告：令和元年度（2019年）」 令和2年6月。

- シンガポール：2,226人
- 欧米圏：1,864人
- アメリカ：708人

アジア圏からの宿泊者が全体の約7割を占め、特に台湾、香港、シンガポールからの宿泊者が多いことが分かります。

図8 東川町の訪日外国人宿泊数：令和元年度(2019年度)



(出典：北海道川上管内総合振興局「川上管内観光入込客数調査報告：令和元年度(2019年)」
令和2年6月)

(4) 産業別特化係数(2016年)

東川町の主要な産業(農業・林業・建設業)について、従業者一人当たりの生産性を示す産業別特化係数を見えます¹⁵⁾。

中分類の製造業では、全国と比較して特化したいくつかの業種が見られます。特に、豊富な森林資源に基づく業種は極めて高い特化係数を示しています。具体的には、家具・装備品製造

業の付加価値額の特化係数は30.36、労働生産性の特化係数は0.91、従業者数の特化係数は67.13です。次いで、木材・木製品製造業では、付加価値額の特化係数が30.36、労働生産性の特化係数が0.85、従業者数の特化係数が23.08となっています。

一方、その他の製造業では、特段顕著な特化係数を示す業種は見られません。

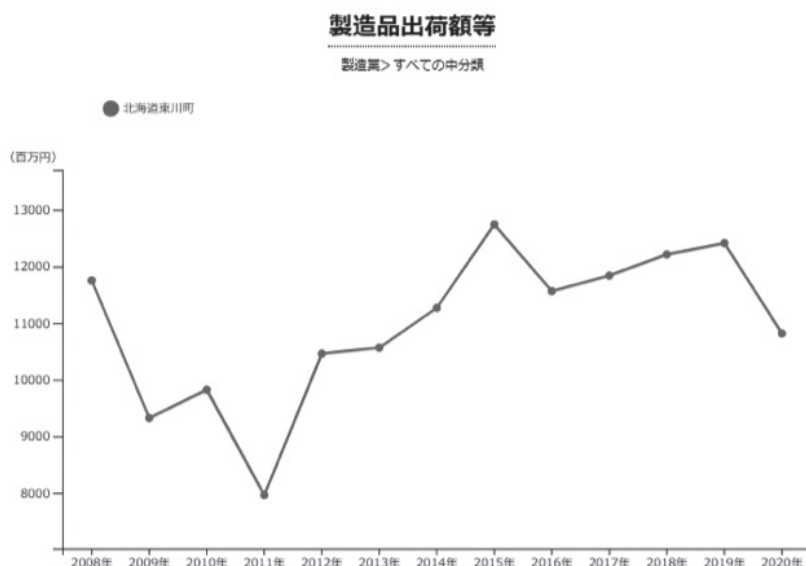
15) 特化係数：域内のある産業の比率を全国と同産業の比率と比較したもの。1.0を超えていれば、当該産業が全国に比べて特化している産業とされる。労働生産性の場合、全国の当該産業の数値を1としたときの、ある地域の当該産業の数値。

(5) 製造業

木工業が盛んな東川町は、多くの家具職人が集まり、「旭川家具」の約3割を生産しています¹⁶⁾。近年は、大雪山の清冽な水を活かした醸造業の誘致にも力を入れており、2020年秋には三千櫻酒造が岐阜県から酒蔵を移転し話題となりました。さらに、2021年にはワイン特区に認定され、雪川醸造がワイン生産を開始するなど、醸造業も活況を呈しています。

東川町の製造品出荷額は、2020年に108億2,800万円で、道内66位、全国1,199位です¹⁷⁾。2008年以降の推移を見ると、2011年には世界的な金融危機の影響を受け、79億7,300万円と大幅に減少しましたが、その後V字回復を遂げました。2015年には127億5,200万円を記録しましたが、2020年には新型コロナウイルス感染症の影響を受け、前年比13%減となりました。

図9 東川町の製造品出荷額の推移



(出典：RESAS産業構造マップ製造業製造品出荷額)

3. 文化・交流

(1) 観光地の数・評価

東川町は、豊かな自然と文化を活かした多様な観光資源を有しています。大雪山地区では、旭岳、旭岳温泉、天人峡温泉、羽衣の滝など、雄大な自然を満喫できます。キ

トウシ地区には、キャンプ場、ケビン、スキー場などが一体となった「キトウシ森林公園家族旅行村」があり、家族連れに人気です。

文化施設としては、ヨーロッパを中心としたデザイン家具コレクションを展示する織田コレクションや、大雪山の貴重な文献を収蔵する東川

16) 北海道旭川市と上川郡東川町や東神楽町など近郊地域の家具メーカーが製造している家具の総称。

17) RESAS 産業構造マップ「製造業 製造品出荷額等」。

町文化芸術交流センターがあります。中心市街地地区には、道の駅ひがしかわ「道草館」を中心に、農村部には木工クラフトのアトリエやカフェ、パン屋など、個性的な店舗が点在しています。

四季折々の魅力も東川町の大きな特徴です。春の新緑、爽やかな夏、紅葉が美しい秋、ウィンタースポーツが楽しめる冬と、それぞれの季節ならではの楽しみ方ができます。

大雪山地域には11軒の温泉宿泊施設があり、古くから登山客や温泉客に親しまれています。2016年度の観光入込客数は29.2万人と、主要な観光地としての地位を確立しています。旭岳は国内でも有数の降雪地帯であり、ノルディックスキの日本代表チームや実業団、大学生の合宿地としても活用されています。

旅行ウェブサイト「トリップアドバイザー」で東川町の観光スポットを検索すると、27件(口コミ数1,151件)がヒットします¹⁸⁾。旭岳関連のスポットが多く、豊かな自然景観が高く評価されています。上位3位は、旭岳(口コミ数374件)、旭岳ロープウェイ(口コミ数241件)、道の駅ひがしかわ「道草館」(口コミ数110件)です。旭岳自然探勝路(口コミ数65件)も人気です。

(2) 文化財

東川町には、1971年に国の天然記念物に指

定され、1977年には特別天然記念物に指定された大雪山があります¹⁹⁾。

(3) 町指定文化財

東川町には、道指定の史跡名勝記念物「羽衣の滝」があります。また、以下の町指定文化財も存在します²⁰⁾。

- ・有形文化財（建造物）
 - 相馬妙見宮
 - 土蔵
 - 明治の家
 - 大正の家（東川町キトウシ森林公園 家族旅行村内）
- ・有形文化財（美術工芸品）
 - 園田仁右衛門翁碑
 - 岡本篤太郎氏碑
 - 開拓記念碑
- ・民族文化財（無形）
 - 北海道東川町郷土芸能羽衣太鼓保存会

(4) 天然記念物²¹⁾

更に、町指定の以下の天然記念物があります。

- ・かしわ（群生）
- ・五葉松（ヒメコマツ）2本
- ・いちい（5本）
- ・シンパク
- ・はいまつ
- ・ズナラ（群生）
- ・東川町の地下水及び大雪旭岳源水

18) トリップアドバイザー「北海道東川町」の「観光スポット」の件数と口コミの合計数。

19) 文化庁 国指定文化財等データベース <https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index>

20) 東川町文化財デジタルアーカイブ <https://higashikawa-bunnkazai-archive.jp/> 並びに東川町地域資源第2章 業務対象地の現況調査。

21) 前述、東川町文化財デジタルアーカイブ。

(5) 景観まちづくりへの貢献度

該当なし²²⁾。

(6) 美術館数・博物館数

大手旅行ウェブサイトのじゃらんによると、東川町には、2件の美術館・博物館があります²³⁾。

- ・ 東川町郷土館
- ・ 東川文化ギャラリー

(7) 観光イベント

東川町では、1年を通して様々な祭りやイベントが開催されています²⁴⁾。中でも、写真の町として知られる東川町を象徴するイベントとして、「東川町国際写真フェスティバル」(通称：フォトフェスタ)と「全国高等学校写真選手権大会」(通称：写真甲子園)が挙げられます。

東川町は、豊かな文化田園都市づくりを目指し、1985年に他に類を見ない「写真の町宣言」を行いました。これは、写真文化を通じて町づくり、生活づくり、そして人づくりを進めるという、ユニークな取り組みです。さらに、2014年には「写真文化首都」を宣言し、写真文化の振興に力を入れています。



東川町では、「写真の町東川賞」(1985年創設)や東川町文化ギャラリーでの展覧会開催など、写真文化を通じてまちづくりが積極的に推進されています。特に「東川町国際写真フェスティバル」(フォトフェスタ)の会期中には、受賞作家作品展、シンポジウム、写真家との交流パーティ、新人写真家の登竜門として知られる「写真インディペンデンス展」、ストリートフォトギャラリーなど、多彩なイベントが開催されています。

また、1994年から開催されている「全国高等学校写真選手権大会」(写真甲子園)は、全国の高校写真部やサークルに新たな活動の場や目標、そして交流の機会を提供することを目的としています。高校生ならではの創造性や感受性を育むとともに、学校生活の充実や特別活動の振興にも貢献しています。大会では、全国の高校写真部やサークルから共同制作による組写真を募集し、審査を経て全国11ブロックから優秀校18校を選抜。選ばれた学校は東川町で開催される本戦大会に出場します。

さらに、国際交流を促進する「高校生国際交流写真フェスティバル」も開催されています²⁵⁾。2015年に始まったこのフェスティバルは、写真文化を通じて世界の人々をつなぎ、未来を担う高校生同士の交流を深めることを目的としています。東川町と交流のあるアジアを中心とした21の国・地域から、テーマに沿った組写真を募集し、選抜された学校を東川町に招待。写

22) 国土交通省、「都市景観大賞 平成14年度『美しいまちなみ優秀賞』」。

23) じゃらん「東川町の博物館」。https://www.jalan.net/kankou/cit_014580000/g2_29/

24) ひがしかわ観光協会。https://higashikawa-town.jp/portal/meguru/panel/20

25) 第8回高校生国際交流写真フェスティバル2023。https://higashikawa-youth-fest.jp/

真を通じた国際交流を推進しています。

東川町では、年間を通して多彩なイベントが開催されています。主なイベントは以下の通りです。

- **ひがしかわ氷まつり**：例年1月の第3週末に羽衣公園で開催。24時間という制限時間の中で制作される氷像の美しさを競うコンテストが見どころです。
- **暮らし楽しくフェスティバル**：毎年春と秋にキトウシ森林公園で開催。地元産の野菜や苗の直売、屋台、国際交流員による各国料理の販売など、地元の魅力が満載です。ステージではダンスや音楽のプログラムも楽しめます。
- **旭岳 山の祭り【ヌプリコロカムイノミ】**：夏山の到来を祝い、登山者と山岳関係者の安全祈願、そして観光地の繁栄を祈る祭りです。
- **ひがしかわどんとこい祭り**：東川町国際写真フェスティバルと同時期に開催。羽衣公園周辺に屋台が並び、賑やかな夏の雰囲気盛り上げます。
- **大雪旭岳SEA TO SUMMIT**：海から里、そして山頂へと人力のみで進む環境スポーツイベント。自然の循環を体感し、かけがえない自然について考える機会を提供します。

(8) 宿泊施設客室数

東川町の公式観光協会のウェブサイトには、観光関連施設として以下の宿泊施設が地区ごと

に掲載されています²⁶⁾。

- **旭岳温泉**：8軒
- **天人峡温泉**：1軒
- **キトウシ**：2軒
- **東川町中心部**：6軒

東川町は、令和2年10月時点で58件の宿泊施設、客室数576、収容人数2,305人を有しています²⁷⁾。これらの施設は主に旭岳周辺に位置し、登山やスキー、スノーボードといったアウトドアアクティビティを楽しむ観光客向けの施設が中心です。小規模でアットホームな山小屋スタイルの宿泊施設が多く、いわゆる高級ホテルのような「ハイクラス」の施設はありません。しかし、山岳アクティビティを楽しむ若者や、自然に囲まれた中で家族との時間を過ごしたい旅行者にとっては最適な環境といえます。

東川町の豊富な観光資源を活かし、地域活性化を図るためには、様々な視点からの取り組みが重要です。その一つとして、近年増加している留学生の中長期滞在に着目することが挙げられます。2015年に国内初の公立日本語学校を開設して以来、年間500人以上の外国人が東川町に中長期滞在しています。彼らは日本文化への関心が高く、滞在中に積極的に旅行を楽しむ傾向があります。そのため、短期滞在の観光客だけでなく、中長期滞在者の潜在的なニーズを掘り起こし、新たな観光需要を創出していくことが、今後の地域活性化の鍵となる事が期待できます。

東川町は、インバウンド観光、特に富裕層をターゲットとした誘客事業に力を入れています。

26) 「ようこそ東川」は一般社団法人ひがしかわ観光協会。 <http://www.welcome-higashikawa.jp/stay/>

27) 一般社団法人大雪カムイミンタラ DMO 「観光地域づくり法人形成・確立計画」 令和4年10月。

しかし、他の観光地との差別化を図り、国内外からの観光客誘致を成功させるためには、滞在型・体験型観光の推進と、それに対応できる高水準な宿泊施設の拡充が不可欠です。ただし、宿泊施設の拡充にあたっては、東川らしさとも言える「適疎」の思想に基づいた、持続可能なまちづくりとのバランスを考慮する必要があります。

(9) 観光案内所・病院の多言語対応

インバウンド観光客、特に海外からの観光客を積極的に受け入れるためには、宿泊施設の整備や拡充だけでなく、多言語対応の観光案内所と病院の整備が非常に重要です。

現状、東川町周辺の多言語対応状況は次のとおりです。

- ・ 道の駅ひがしかわ「道草館」：英語と中国語には常勤スタッフが対応可能。韓国語には未対応。
- ・ 旭川観光物産情報センター（東川町から車で約30分）：英語と中国語に常勤スタッフが対応可能。韓国語、スペイン語、タイ語はパートタイムでの対応が可能。
- ・ 旭川空港総合案内所：英語と中国語に常勤スタッフが対応可能。韓国語には未対応。

この様に英語と中国語対応はある程度整っている。また町には韓国語のほか9ヶ国の国際交流員がおり、必要に応じて対応している。

一方、東川町には以下の4つの医療機関がありますが、これらの医療機関での多言語対応についてのデータはなく、追跡調査の対象となっ

ています。

- ・ 国民健康保険東川町立診療所
- ・ 東川歯科クリニック
- ・ 松山デンタルクリニック
- ・ 東川こども歯科クリニック

また、病院ナビによると、旭川市には以下の7つの多言語対応病院があります²⁸⁾。

- ・ あさひかわ眼科クリニック（英語）
- ・ 杉本こども・内科クリニック（英語）
- ・ 医療法人光健会 十川眼科（英語）
- ・ のむらひふ科耳鼻咽喉科甲状腺クリニック（英語）
- ・ 医療法人社団 清水内科医院（英語）
- ・ 寺西眼科医院（英語）
- ・ 呼吸器内科・内科とおるクリニック（英語）

(10) 休日の人の多さ

RESAS観光マップのデータから、東川町の観光客の動向を分析する上で重要な示唆が得られます。2020年の休日の午後2時の滞在人口を基に算出された滞在人口率は、5月以降増加傾向を示し、特に9月にピークを迎えていることが分かります。

これは、夏の登山シーズンや秋の紅葉シーズンに、山岳景観を楽しむ観光客が東川町を訪れていることを示唆しています。9月の滞在人口率1.13は、国勢調査人口（15歳以上80歳未満）を上回る滞在人口を記録しており、観光客の流入が東川町の経済活動に大きく貢献していると考えられます²⁹⁾。

このデータは、観光客誘致のための施策を検討

28) 病院ナビ 旭川市。 https://byoinnavi.jp/hokkaido/asahikawashi/english_speakers

29) RESAS まちづくりマップ「滞在人口率」。

する上で重要な指標です。例えば、9月の紅葉シーズンに合わせてイベントを開催したり、観光客向けの施設を整備することで、更なる経済

効果が期待できます。また、5月以降の増加傾向を踏まえ、夏場の観光客向けのアクティビティ開発なども有効な手段と考えられます。

図10 東川町の訪日外国旅行者訪問数の推移(2019年) 昼間(10-18時)



(出典：RESAS観光マップ「外国人滞在分析 地域別滞在者数の推移(2019年) 昼間(10-18時)」)

図10 東川町の訪日外国旅行者訪問数の推移(2019年) 昼間(10-18時)

(出典：RESAS観光マップ「外国人滞在分析 地域別滞在者数の推移(2019年) 昼間(10-18時)」)

(11) 行楽・観光目的の訪問の多さ

「地域ブランド調査2022」対象地域に入っていないため、該当なし³⁰⁾。

(12) 訪日外国旅行者訪問数(2019年)

東川町の観光客、特に外国人観光客の季節変動が大きいことが分かります³¹⁾。

- 年間の昼間滞在者数：29,171人(月平均2,430.9人)
- 外国人観光客のピーク：7月(3,563人)、8月(3,273人)
- 外国人観光客の閑散期：11月(789人)

これらの数字は、東川町の観光客誘致戦略を考える上で重要な示唆を与えてくれます。7月と8月の訪問者数の多さは、夏の避暑地としての魅力、あるいは登山などのアウトドアアクティビティの需要の高さを示していると考えられます。

一方で、11月の訪問者数が極端に少ないこ

30) 株式会社ブランド総合研究所「地域ブランド調査2022」における「訪問経験 Q9(行楽・観光のため)」の値(%)。

31) RESAS観光マップ「外国人滞在分析」。

とは、冬季の集客に向けた対策が必要であることを示しています。冬ならではの観光資源を活かしたイベントやアクティビティの開発、あるいは冬季の観光客向けの割引キャンペーンなどを検討することで、閑散期の集客向上を図ることが重要です。

また、年間を通じた安定的な観光客誘致の

ためには、季節ごとの観光資源の魅力を効果的に発信していく必要があります。夏だけでなく、春の新緑、秋の紅葉、冬の雪景色など、それぞれの季節の魅力を多言語で発信し、多様なニーズに対応した観光プランを提案することで、年間を通じた観光客の誘致を目指す必要があります。

図 11 東川町の訪日外国旅行者訪問数の推移（2019 年）夜間（2－5 時）



（出典：RESAS 観光マップ「外国人滞在分析 地域別滞在者数の推移（2019年）夜間（2-5時）」）

（13）訪日外国人旅行者宿泊数（2019年）

東川町の夜間滞在者数のデータは、外国人観光客の滞在傾向を理解する上で重要な情報を提供しています³²⁾。

- ・年間夜間滞在者数：22,231人（月平均1,852.6人）
- ・外国人宿泊者の傾向：訪日外国人旅行者の訪問傾向と同様で、夏場に集中。

年間夜間滞在者数が約22,000人であるのに

対し、訪日外国人旅行者の約75%が東川町に滞在しているという情報は、外国人観光客が東川町の観光客全体に占める割合が非常に高いことを示しています。

また、外国人宿泊者の月別推移が訪日外国人旅行者の訪問傾向と同様のパターンを示すということは、夏場のアウトドアアクティビティが外国人観光客の主要な目的であることを裏付けています。

32) RESAS 観光マップ「外国人滞在分析」

(14) 国際会議開催件数

東川町では、国際的イベントは行われているが、2010年から2019年の10年間の国際会議開催は0件である³³⁾。

(15) 観光客誘致活動

大雪カムイミントラDMO³⁴⁾は、旭川市を中心とした広域連携によって観光地域づくりを推進する組織であり、東川町もその一員として重要な役割を担っています。DMOの目的は、大雪山国立公園を中心とした地域の観光資源を活かし、国内外からの観光客誘致による地域経済の活性化を図ることです。

東川町はDMOにおいて、「写真の町」としての独自性を活かした観光振興が期待されています。また、豊富な地下水資源や、旭岳、天人峡といった自然景観も大きな魅力です。さらに、写真甲子園や地酒「三千櫻」といった地域独自のイベントや特産品も、観光客誘致の重要な要素となっています。

DMOの活動を通じて、東川町は以下のようなメリットを享受できると考えられます。

- **広域連携による相乗効果:** 他の自治体との連携により、より効果的な観光プロモーションや情報発信が可能。
- **観光客の増加:** DMOによる効果的なマーケティング活動により、東川町への観光客の増加が期待。
- **地域経済の活性化:** 観光客の増加は、地域内の消費を促進し、地域経済の活性化に貢献。
- **ブランドイメージの向上:** DMOによる統

一的なブランド戦略により、東川町のブランドイメージ向上。

一方で、DMOに参加することで、以下のような課題も想定されます。

- **地域間の調整:** 複数の自治体が連携するため、意思決定や事業推進において調整が必要。
- **費用負担:** DMOの運営には費用負担が発生。
- **効果測定:** DMOの活動による効果を適切に測定し、改善していく必要性。

東川町は、DMOの活動に積極的に参加することで、これらのメリットを最大限に活かし、課題を克服していく必要があります。特に、「写真の町」という独自のブランドイメージを強化し、他の地域との差別化を図ることで、更なる観光客誘致と地域経済の活性化を目指すべきです。また、DMO内での連携を強化し、広域観光ルートの開発や共同プロモーションなどを積極的に展開していくことが重要です。

(16) 自治体SNSフォロワー数

東川町は、SNSを活用した発信に非常に積極的です。町の公式SNSアカウントは12あります。中でも、Facebookのフォロワー数は9,563人、Twitterのフォロワー数は2,874人、YouTubeのチャンネル登録者は881人を超えています。

(17) 魅力度・認知度・観光意欲度

東川町は「地域ブランド調査2022」では取

33) 日本政府観光局「2019年国際会議統計 資料編 1 国内都市別 国際会議開催件数一覧表」。

34) Mountain City Resort. <https://www.taisetsu-kamui.jp/>

り上げられていないため割愛。

(18) 日本人の海外留学・海外派遣数

東川町には大学は存在しないが、以下の教育機関がある。

- ・ 学校法人北工学園旭川福祉専門学校
- ・ 東川町立東川日本語学校
- ・ 北海道東川高等学校

東川町では、姉妹都市への高校生海外派遣事業として、令和6年には、ラトビア、カナダ、台湾に各2名ずつ生徒を派遣しており、国際交流に積極的な姿勢をとっています³⁵⁾。

(19) 姉妹都市提携数

東川町の公式HPによると、次の海外の都市と姉妹提携しています³⁶⁾。

姉妹都市

- ・ キャンモア町（カナダ アルバータ州）
1989年（平成元年）7月12日提携
- ・ ルーイエナ町（ラトビア ルーイエナ州） 2008年（平成20年）7月17日提携
- ・ アニワ市（ロシア サハリン州）
2019年（令和元年）9月18日日提携

文化交流提携都市

- ・ 寧越郡（大韓民国 江原特別自治道）
2010年（平成22年）11月4日締結

(20) 姉妹都市への青少年海外派遣事業

東川町の姉妹都市への青少年海外派遣事業は、異文化理解や国際感覚を育成し、地域の国際化

を推進する重要な取り組みです。この事業は若者の成長を促し、将来の国際人材育成に貢献します。また、姉妹都市との交流を深めることで、新たな文化や価値観を地域に取り入れる機会にも繋がります。

さらに、国際交流は町の活性化にも寄与します。これまでの派遣事業の経験を生かし、新たな国際交流プログラムの開発や既存プログラムを検討することで、生徒の成長と地域の発展が期待されます。事業を効果的に運営するためには、プログラム内容の充実、参加者へのサポート、広報活動の強化、関係機関との連携が重要であり、これらを通じてさらなる発展が期待されます³⁷⁾。

(21) 高等学校による海外派遣事業を通じた派遣数

報告なし。

(22) その他の枠組みによる

青少年の海外派遣事業

東川町は、写真、日本語教育、JETプログラム、介護人材育成など、多様な分野で国際交流事業を展開しており、その積極的な姿勢は高く評価できます。特に、公立日本語学校や写真フェスティバルは、他地域にはないユニークな取り組みであり、町の特色を活かした国際交流を推進しています。

- ・ 写真を通じた交流：世界中の高校生が集う「高校生国際交流写真フェスティバル」など、

35) 北海道東川高等学校。http://www.higashikawa.hokkaido-c.ed.jp/

36) https://higashikawa-town.jp/portal/machi/panel/9

37) 総務省 国際交流の取組み 海外の人たち共に～多文化共生のまちづくり。

写真を通じた交流を行っています（2019年度は22の国・地域が参加）。

- 日本語教育事業：全国唯一となる公立日本語学校のほか、福祉専門学校による日本語学科で常時約300名が学んでいます。
- JETプログラム活用：JETプログラムにより、15か国から19名の外国人青年を招致しています。
 - 英語指導助手：5名
 - スポーツ国際交流員：4名
 - 国際交流員：11名
- 外国人介護人材育成事業：他地域と連携し、留学生を招致して、東川町内の福祉専門学校で全国的に不足する介護福祉士を養成しています。

4. 留学生の受入れ体制

東川町は、一般的な外国人住民ではなく、本格的には留学生に対する受入れに積極的に取り組んでいる自治体として知られています³⁸⁾。特に以下の点が特徴として挙げられます。

- 自治体の積極的な取り組み：公立日本語学校を開設するなど、自治体自らが外国人住民の受け入れに積極的に取り組んでいる。
- 多言語対応の充実：医療、教育、防災など、様々な分野で多言語対応が充実しており、外国人住民が安心して生活できる環境が整えられています。
- 地域住民との交流促進：国際交流員による活動や多文化共生室の設置など、地域住民との交流を促進する取り組みが活発に行われています。

具体的な取り組みは、次のとおりです。

医療体制

- **多言語対応**：町内の医療機関では、日本語だけでなく、英語やポルトガル語など、多言語対応可能な医療機関が増えています。
- **医療費助成制度**：町独自の医療費助成制度があり、外国人住民も利用可能。
- **健康診断**：定期的な健康診断や予防接種の情報を外国人向けに提供。
- **通訳支援**：必要に応じて、通訳者を手配する体制が整っている。

教育

- **公立日本語学校**：町が運営する日本語学校があり、日本語教育の機会が提供されている。
- **小中学校**：町内の小中学校では、外国人の児童生徒に対する支援体制が整っており、日本語指導や文化交流などが行われている。

ごみ処理

- **多言語での情報提供**：ごみ出しのルールや分別方法が、多言語で周知されている。
- **回収日などの情報提供**：各世帯に、多言語で書かれたごみ収集カレンダーが配布されている。

防災

- **多言語での情報提供**：災害発生時の避難情報や防災に関する情報が、多言語で提供されている。
- **防災教育**：外国人住民向けに防災に関する教育プログラムを実施し、災害時の行動についての理解を深めている。

38) 東川町 HP。 <https://higashikawa-town.jp/portal/kurashi>

その他

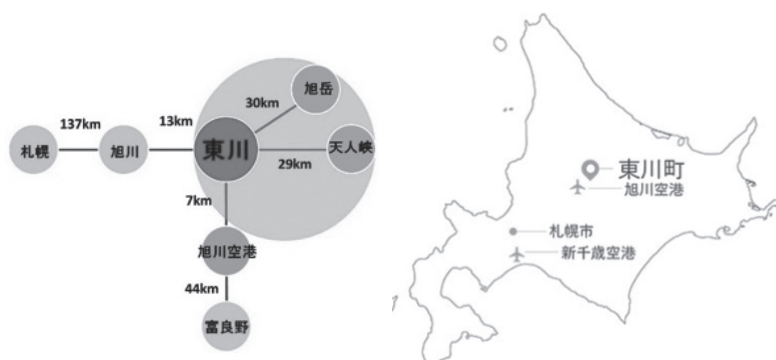
- ・ **国際交流員**: 国際交流員が、外国人住民の生活支援や町民との交流を促進している。
- ・ **多文化共生室**: 町には、公立日本語学校と連携し、多文化共生に関する相談や情報提供を行う多文化共生室があり、外国人住民の受け入れ体制を強化している。

5. 交通・アクセス

(1) 公共交通の利便性

東川町は、道北の中核都市旭川市の中心部から車で約22分（約13km）、旭川空港から車で約13分（約7km）と、交通アクセスが非常に便利です。最寄りの駅はJR旭川駅で、町内には鉄道が通っていません。旭川市中心部へのアクセスは、路線バスまたは車での移動です³⁹⁾。路線バスは、旭川駅と東川道草館前を結ぶ旭川電気軌道が運行しており、所要時間は約30分です。

図 12 東川町への航空アクセス



(出展：一般社団法人ひがしかわ観光協会HP ほか)

東川町では、旭川市内、旭川駅、旭川空港、東川町中心部、旭岳温泉を結ぶ1日4往復のシャトルバス「いで湯号」をはじめ、「旭川駅と新千歳空港・南千歳駅を結ぶたいせつライナー」など、複数の公共交通機関が運行されています。地域内では、町や地域住民が主体となって実施している乗り合いタクシーやボランティアによる送迎サービスも利用され、多様な交通手段が整備されています。しかし、現況では日常生活の交通手段として自家用車を利用する人が多く、

少子高齢化が進展する中、質の高い公共交通サービスの提供が求められています。

このような状況を受け、東川町は、自動運転バスの導入による公共交通の利便性向上と地域活性化を目指し、革新的な取り組みを進めています。2023年3月には、BOLDLY 株式会社と共同で、町役場や道の駅ひがしかわ『道草館』周辺を走る約2.6kmのルートにおいて、自動運転バス「NAVYA ARMA」の実証実験を実施しました⁴⁰⁾。この実験では、雪上での走行性

39) ー「ようこそ東川」一般社団法人ひがしかわ観光協会。 <http://www.welcome-higashikawa.jp/about/>

40) 日刊工業新聞「北海道の東川町において雪道での自動運転バスの試運行を実施」2023年3月6日。

能や、町の中心部における運行の安全性などを検証しました。

(2) 空港アクセス時間の短さ

東川町への航空アクセスは、主に旭川空港を利用する方法が一般的です。旭川空港からは、タクシー、バス、レンタカーなど、様々な交通手段で東川町へアクセスできます。

旭川空港⁴¹⁾からのアクセス

- **旭川空港までのアクセス：**
 - **国内線：**東京（羽田）、名古屋、大阪など主要都市からの直行便が多数運航されています。LCCも利用できるため、比較的安価にアクセス可能です。
 - **国際線：**アジア圏からの直行便も運航されており、海外からのアクセスも便利です。
- **旭川空港から東川町へのアクセス：**
 - **タクシー：**最も早い移動手段です。所要時間は約13分と短く、荷物が多い場合や急いでいる場合におすすめです。
 - **バス：**旭川空港から東川町へ向かう路線バスも運行されています。タクシーに比べて料金は安価ですが、所要時間は長くなります。
 - **レンタカー：**自由な旅程で移動したい方におすすめです。旭川空港内にレンタカー会社が複数入居しています。

新千歳空港⁴²⁾からのアクセス

新千歳空港から東川町へは、以下の経路が一

般的です。

- **新千歳空港から旭川駅へ：**特急列車を利用し、約1時間30分で旭川駅に到着します。
- **旭川駅から東川町へ：**旭川駅から東川町へ向かうバスに乗り換え、約1時間で東川町に到着します。

(3) 新幹線の利用しやすさ

新幹線利用の場合、東川町へのアクセスは、北海道新幹線の終点である新函館北斗駅で乗り換えが必要です⁴³⁾。新函館北斗ー札幌間は在来線特急で3時間10分～3時間40分ほどです。札幌から最寄りの旭川駅までは、特急列車が1日28本と頻繁に運行されており、約1時間半で到着できます。普通列車も利用可能ですが、所要時間は約3時間と長くなります。

(4) インターチェンジ数

東川町へのアクセスは、高速道路を利用する場合、道央自動車道が便利です。

道央自動車道と東川町

道央自動車道は、札幌から旭川へと続く北海道を代表する高速道路です。東川町へは、この道央自動車道を利用し、旭川北インターチェンジまたは旭川鷹栖インターチェンジで降りるのが一般的です。

各インターチェンジからのアクセス

- **旭川北インターチェンジ：**東川町の中心部へ最も近いインターチェンジです。周辺にはスーパーマーケットやガソリンスタ

41) 旭川空港： <https://www.aapb.co.jp/>

42) 新千歳空港： <https://www.hokkaido-airports.com/ja/new-chitose/>

43) JR 北海道。

44) Google Map ルート検索による

ンドなどの施設も充実しています。

- ・ 旭川鷹栖インターチェンジ：旭川北インターチェンジよりも少しだけ東川町から離れていますが、広大な駐車場を備えた道の駅「ひがしかわ道草館」が近くにあります。

各インターチェンジから東川町までの所要時間⁴⁴⁾

- ・ 旭川北インターチェンジ：車で約25分
- ・ 旭川鷹栖インターチェンジ：車で約40分

2. 東川町のグローバルデザイン提案

東川町には、地域固有の地域資源が豊富に存在し、また他の自治体に比べ、先進的な取り組みも積極的に行っている。しかし現状に満足せず、さらに東川町の特徴を活かした以下三つの提案を行います。

(1) アウトドアアクティビティの拡充

概要

東川町の豊かな自然環境を活かし、インバウンド観光客向けに多様なアウトドア体験を提供することで、地域の魅力を伝え、経済活性化を図る。ハイキング、スキー、マウンテンバイク、バードウォッチングなど、自然とのふれあいを重視した体験を提供する。

ビジョン

国際的な認知度を高め、持続可能な観光を実現するため、世界レベルのアウトドアアクティビティ拠点となる。自然環境を保全しつつ、地域住民と連携し、質の高いアウトドア体験を提供することで、東川町を世界に誇る自然観光地として確立する。

ターゲット層

- ・ 自然やアウトドアに興味のある外国人観光客（特にアクティブな旅行者）

- ・ エコツーリズムを楽しむ層
- ・ 家族連れや友人グループでの旅行者
- ・ 冒険や新しい体験を求める若年層

具体的な取組み

①ガイド付きアウトドアツアーの拡充

自然環境や地域の歴史解説付きで、地元のガイドによるハイキングやマウンテンバイクツアー。

- ・ 特定のニッチなターゲット層に特化：女性限定の登山ツアー、写真愛好家向けの撮影ツアー、高齢者向けの自然散策ツアーなど。
- ・ ユニークな体験を提供：熱気球に乗っての空中散歩、洞窟探検、星空観察ツアー、野生動物観察ツアー、地元の職人によるワークショップと組み合わせたツアーなど。
- ・ 地域資源を最大限に活用：地元の食材を使ったバーベキュー、地元ガイドによる歴史や文化の解説付きツアー、地域住民との交流を取り入れたツアーなど。
- ・ 環境への配慮：ゴミ拾い活動を組み込んだツアー、環境教育を取り入れたツアー、自然保護団体への寄付を行うツアーなど。
- ・ テクノロジーの活用：AR技術を活用したガイド、オンライン予約システム、SNSを活用した情報発信、参加者同士のコミュニケーションツールなど。
- ・ 具体的なツアーの例：
 - ・ トラベル・ライフ株式会社の「キャニオニングツアー」：日本でいち早くキャニオニングツアーを事業化し、安全管理、ガイドの質、顧客満足度において高い評価を得ている。
 - ・ アルパインツアーサービス株式会社の「海外登山ツアー」：豊富な経験と実

績を持つガイドによる、世界中の名峰への登山ツアーを提供し、登山愛好家から高い信頼を得ている。

。自然学校などの団体が主催する「自然体験ツアー」：子ども向けの自然体験ツアーなど、教育的な要素を取り入れたツアーも人気が高い。

②季節ごとのアクティビティプラン

夏は川遊びやキャンプ、冬はスキーやスノーボードなど、季節に合わせたアクティビティを企画。東川町で体験できる季節ごとのアクティビティプランを提案する。

・ 春（4月～6月）

。写真撮影ツアー：残雪の旭岳を背景に、田んぼに水が張られた美しい風景を撮影。新緑の景色も魅力的。フォトフェスティバル関連の展示も楽しめる。

。サイクリング：大雪山連峰を眺めながら、田園地帯をサイクリング。レンタルサイクルも利用可能。

。ラフティング：忠別川でのラフティング。雪解け水で水量が増え、迫力満点。

。山菜採り体験：地元ガイドと一緒に山菜採り。採れたての山菜を使った料理も楽しめる。

。東川町郷土館見学：東川町の開拓の歴史や文化を学ぶ。

・ 夏（7月～9月）

。旭岳登山：ロープウェイを利用して手軽に登山を楽しめる。高山植物の観察もおすすめ。

。キャンプ：大自然の中でキャンプ。満天の星空の下で過ごす時間は格別。

。カヌー・カヤック体験：忠別川でのカヌー・カヤック。穏やかな流れで初心者でも楽しめる。

。星空観察ツアー：光害が少ない東川町は星空観察に最適。天の川や流れ星も見える。

。ひがしかわ氷まつり（8月）：真夏の氷のイベント。氷像や氷の滑り台を楽しむ。

・ 秋（10月～11月）

。紅葉狩り：大雪山国立公園の鮮やかな紅葉を堪能。旭岳ロープウェイからの景色もおすすめ。

。写真撮影ツアー：紅葉と田んぼの黄金色の稲穂のコントラストを撮影。

。キノコ狩り体験：地元ガイドと一緒にキノコ狩り。採れたてのキノコを使った料理も楽しめる。

。農家体験：ジャガイモ掘りや収穫体験など、農業体験を通して東川町の食文化に触れる。

。クラフト体験：木工や陶芸など、地元の素材を使ったクラフト体験。

・ 冬（12月～3月）

。スキー・スノーボード：旭岳スキー場、キャンモアスキー場などでウィンタースポーツを楽しむ。

。スノーシューイング：雪原をスノーシューで散策。動物の足跡を見つけたり、雪景色を楽しむ。

。犬ぞり体験：犬ぞり体験で雪原を駆け抜ける。

。アイスフィッシング：凍った湖でワカサギ釣り。

- 雪像づくり：家族や友人と雪像づくりに挑戦。

③体験型イベントの開催

アウトドアフェスティバルやマルシェで、地域の特産品や文化体験を提供。数多くの体験型イベントが開催されていますが、以下に具体的な取組を提案する。

- 写真・映像関連
 - ひがしかわ国際写真フェスティバル：毎年夏に開催される、国内外の写真家や写真愛好家が参加する一大イベント。ワークショップ、トークショー、展示など、様々なプログラムなど。
 - 写真ワークショップ：風景写真、ポートレート、野生動物撮影など、多岐のテーマにわたり、プロの写真家から直接指導を受けられるワークショップなど。
- 自然体験
 - ラフティング：初心者から上級者まで楽しめるコースが用意されている忠別川でのラフティングツアー。
 - カヌー・カヤック体験：ガイド付きツアーもあり、安心して参加できる忠別川や近くの湖でカヌーやカヤック。
 - 旭岳登山ガイドツアー：高山植物の観察や絶景ポイントを経験豊富なガイドと共に案内する旭岳登山。
 - ネイチャークラフト：子どもから大人まで楽しめる木の実や枝など自然の素材を使ったクラフト体験。
 - 星空観察会：専門家による解説付きの星空観察。
- 食関連

- 東川米収穫体験：稲刈りや脱穀など、米作りの一連の作業や収穫した新米を味わう体験。

- そば打ち体験：地元産のそば粉を使ったそば打ち体験。
- 手作り味噌作り教室：発酵食品の奥深さを学ぶ地元の味噌蔵で味噌作り体験。

• 文化・芸術関連

- 木工体験：家具の町としても知られる東川町で木工クラフト体験。
- 陶芸体験：地元の陶芸工房で、ろくろ使い自分の陶芸体験。
- 染色体験：オリジナルのストールやバッグなど自然素材を使った染色体験。

視点

①持続可能な観光の推進

東川町のインバウンド観光客向けのエコツーリズムを促進し、自然環境保護と観光の両立を目指す。

- 環境保護の視点
 - 自然環境への負荷軽減：アクティビティ参加人数の制限、特定エリアへのアクセス制限、ゴミ持ち帰り運動の徹底、環境に配慮した資材の使用など、自然環境への負荷を最小限に抑える対策を実施。
 - 自然再生への貢献：植樹活動、清掃活動など、観光客が参加できる自然再生プログラムを企画し、環境保護意識の向上を図る。
 - 二酸化炭素排出量削減：公共交通機関の利用促進、電気自動車・自転車の活用、エコツアーの開発など、CO2排出量削減に貢献するアクティビティを推進。
 - 環境教育プログラムの導入：ガイドに

よる自然解説、環境問題に関するワークショップなど、観光客に環境保護の重要性を伝える教育プログラムを導入。

- 地域社会への貢献の視点
 - 地域経済への波及効果：地元のガイド、宿泊施設、飲食店、土産物店などを活用し、地域経済への波及効果を高める。
 - 地域住民との交流促進：ホームステイ、民泊、地域住民との交流イベントなど、観光客と地域住民が交流できる機会を創出。
 - 地域文化の尊重：伝統工芸体験、郷土料理教室など、地域文化を体験できるアクティビティを提供し、文化の継承と発展に貢献。
 - 雇用創出：地元住民をガイドやスタッフとして雇用し、雇用機会を創出。
- 長期的な観光業の繁栄の視点
 - 観光客の満足度向上：質の高いアクティビティ、快適な宿泊施設、多言語対応など、観光客の満足度を高めるための取り組みを継続的に実施。
 - リピーターの獲得：魅力的なアクティビティ、地域住民との温かい交流など、リピーター獲得につながる施策を展開。
 - 観光客の分散化：通年型観光の推進、新たな観光ルートの開発など、観光客の分散化を図り、オーバーツーリズムを防ぐ。
 - 適切な価格設定：適正価格を設定することで、観光客と地域事業者双方にとってメリットのある持続可能な観光モデルを構築。
- 具体的なアクティビティの例
 - エコツアー：自然観察、バードウォッチング、トレッキングなど、自然環境への負荷が少ないアクティビティ。

- 農業体験：田植え、稲刈り、収穫体験など、地域農業を体験できるアクティビティ。

- 文化体験：伝統工芸体験、郷土料理教室、地元の祭りへの参加など、地域文化に触れることができるアクティビティ。

- 写真撮影ツアー：東川町の美しい自然景観を撮影する写真ツアー。

②地域との連携強化

地域住民や企業との連携による観光資源の共同活用で、地域活性化を図る。

- 関係構築と情報共有
 - 地域協議会/ワーキンググループの設立：観光事業者、宿泊施設、飲食店、地域住民代表、行政担当者などで構成される協議会を設立し、定期的な情報交換、意見交換、連携事業の企画・実施を行う。
 - 地域住民への説明会の実施：アクティビティ拡充計画について、地域住民への説明会を実施し、理解と協力を得る。
 - 多言語対応の情報発信：地域住民向けにも、計画内容を多言語で分かりやすく説明する資料を作成し、配布・掲示する。
- 地域資源の活用と連携事業
 - 地元ガイドの育成・活用：地域住民をガイドとして育成し、地域ならではの視点で案内を提供。多言語対応可能なガイドの育成も重要。
 - 地元食材を使ったアクティビティ：収穫体験、郷土料理教室、バーベキューなど、地元食材を活用したアクティビティを開発。
 - 宿泊施設との連携：宿泊施設と連携し、アクティビティ付き宿泊プランを企画・販売。

- 交通機関との連携：アクセスしやすいよう、バス、タクシー、レンタサイクルなどの交通機関との連携を強化。
- 地域イベントとの連携：地元の祭り、イベントと連携し、観光客が地域文化に触れられる機会を創出。
- 空き家・遊休地の活用：アクティビティ拠点、宿泊施設、休憩所などとして、空き家・遊休地を活用。
- 経済効果の地域還元
 - 地域製品の販売促進：アクティビティ参加者に地元産品を販売する機会を設ける。
 - 地域雇用の創出：ガイド、スタッフ、アクティビティ運営者など、地域住民の雇用を創出。
 - 公平な利益配分：観光客だけでなく、地域住民にも利益が還元される仕組みを構築。
- 課題解決と持続可能性の確保
 - オーバーツーリズム対策：地域住民の生活環境への影響を最小限に抑えるため、観光客の分散化、マナー啓発などを実施。
 - 環境保護への取り組み：自然環境への負荷を軽減するため、ゴミ持ち帰り運動、環境教育プログラムの実施などに取り組む。
 - 多文化共生：地域住民と観光客が相互理解を深め、多文化共生社会の実現を目指す。

③国際的な認知度向上

アウトドアアクティビティを通じて地域の魅力を発信し、国際的な観光地としての地位確立を目指す。

- ターゲット設定と効果的な情報発信
 - ターゲット国の選定：東川町の魅力に合致する、関心の高い国・地域をターゲッ

トに絞り込む。(例：自然愛好家が多い国、写真文化に関心の高い国など)

- 多言語対応ウェブサイト・SNS：多言語（英語、中国語、韓国語など）に対応したウェブサイト、SNSアカウントを開設し、東川町の魅力、アクティビティ情報を発信。高画質の写真、動画を積極的に活用。
- 魅力的なコンテンツ作成：各ターゲット国の文化、嗜好に合わせた情報発信を心がける。例えば、ターゲット国の言語でブログ記事を作成したり、現地のインフルエンサーと連携したプロモーションを実施。
- オンライン旅行代理店(OTA)との連携：Booking.com、Expedia、TripAdvisorなど、世界的に利用されているOTAに登録し、予約システムを連携。
- 海外メディアへのPR：海外の旅行雑誌、ウェブサイト、テレビ番組などに、東川町の魅力を発信。プレスツアーなどを企画。
- 国際的なイベント・キャンペーン
 - 国際的な観光フェアへの参加：海外で開催される観光フェアに参加し、東川町のアクティビティをPR。
 - 写真コンテストの開催：東川町は「写真の町」として知られているため、国際的な写真コンテストを開催し、認知度向上を図る。
 - テーマを設定したキャンペーン：季節ごとのイベント、特定のアクティビティに焦点を当てたキャンペーンを実施。
- 関係機関との連携
 - 観光庁、JNTO(日本政府観光局)との連携：国の観光政策を活用し、情報発信、プロモーション活動を展開。

- 北海道、近隣自治体との連携：広域的な観光ルートを開発し、連携してプロモーション活動を実施。
- 在日外国公館との連携：各国の大使館、領事館と連携し、情報発信、イベント開催などを協力して行う。
- 姉妹都市・友好都市との交流：姉妹都市・友好都市との交流を深め、相互の観光促進につなげる。
- 受け入れ環境整備
 - 多言語対応：案内表示、パンフレット、ウェブサイトなどを多言語化。
 - Wi-Fi環境整備：無料Wi-Fiスポットを拡充。
 - 多様な決済方法への対応：クレジットカード、電子マネー、QRコード決済など、多様な決済方法に対応。
 - 多文化理解研修の実施：観光事業者、地域住民向けに多文化理解研修を実施し、外国人観光客への適切な対応を促進。

課題

- 情報発信の不足と多言語対応
 - 情報源の不足：観光客が求める情報（アクティビティ、交通、宿泊、飲食など）が不足している、または探しにくい。
 - 多言語対応の不足：外国人観光客向けの多言語化が不十分で、情報が伝わりにくい。
 - 最新情報の欠如：ウェブサイトやパンフレットなどの情報が古く、最新の情報が反映されていない。
- 言語の壁と外国人観光客への対応
 - コミュニケーション不足：スタッフの語学力不足により、外国人観光客との円滑なコミュニケーションが難しい。
 - 文化の違いによるトラブル：異文化理解不足によるトラブルが発生する可能性がある。
 - 外国人観光客向けのサービス不足：外国人観光客のニーズに合わせたサービス（ハラル対応、多言語メニューなど）が不足している。
- 季節変動の影響とオフシーズンの集客
 - ハイシーズン集中：特定の季節に観光客が集中し、施設や交通機関の負荷が大きい。
 - オフシーズンの集客力不足：オフシーズンには観光客が少なく、地域経済に影響が出る。
 - 天候に左右される観光：天候に左右されやすく、安定した観光客誘致が難しい。
- 安全管理の確保とアウトドア活動におけるリスクマネジメント
 - 自然災害リスク：地震、台風、雪崩など、自然災害のリスクが高い。
 - アウトドアアクティビティのリスク：登山、キャンプ、川下りなど、アウトドアアクティビティに伴う事故のリスクがある。
 - 緊急時の対応：緊急事態発生時の対応体制が不十分である。
- 宿泊施設の老朽化と予約システムの非効率性
 - 老朽化による快適性の低下：宿泊施設の老朽化により、快適な滞在を提供できない。
 - 予約システムの不便さ：予約システムが使いにくく、外国人観光客にとっては特に障壁となる。
 - 競合施設との差別化不足：他地域との競争において、宿泊施設の差別化ができていない。

いない。

(2)「地元特産品を活かした食文化の発信」

概要

「地元特産品を活かした食文化の発信」は、東川町の豊かな農産物や地域の食文化を国際的にアピールし、インバウンド観光客を惹きつけると同時に、特産品の輸出を促進する取り組みです。

特に、「アウトドアアクティビティの拡充」の提案との組み合わせにより、食体験を組み合わせた魅力的なツアーやイベントを提供することで、地域の魅力を伝え、経済活性化を図ることができる。

ビジョン

町の豊かな農産物と食文化を国内外に発信し、特にインバウンド観光客誘致と特産品輸出促進を目的とし、アウトドアアクティビティと組み合わせた食体験を提供することで、地域の魅力向上と経済活性化に繋がることを目指す。

ターゲット層

- ・ 自然やアウトドア、食文化に興味のある外国人観光客（特にアクティブな旅行者、グルメツーリズムを楽しむ層）
- ・ エコツーリズムを楽しむ層
- ・ 家族連れや友人グループでの旅行者
- ・ 冒険や新しい体験を求める若年層
- ・ 健康志向の旅行者
- ・ 地元の食材に興味を持つ料理愛好者

具体的な取り組み

①ガイド付きアウトドア&フードツアー

自然環境や地域の歴史解説付きで、地元ガイドによるハイキングやマウンテンバイクツアーに、地元特産品を使った食事や食体験を組み込む。

○ 山菜採り&クッキングツアー（春）:

山菜採り体験後、地元のシェフと一緒に採れたての山菜を使った料理を作り、味わう。

○ 旭岳登山&山頂ランチ（夏）:

旭岳登山後、山頂で地元産の食材を使ったお弁当を楽しむ。絶景の中で味わう食事は格別。

○ 紅葉狩り&キノコ鍋ツアー（秋）:

紅葉狩りとキノコ狩り体験後、地元のレストランで採れたてのキノコを使った鍋を囲む。

○ スノーシューイング&チーズフォンデュ体験（冬）:

スノーシューイングで雪景色を楽しんだ後、地元産のチーズを使ったチーズフォンデュを楽しむ。

②季節ごとのアクティビティ&フードプラン

各季節のアウトドアアクティビティに合わせた食体験を提供。

○ 春: 山菜採り体験&クッキングツアー、地元野菜を使ったバーベキュー、地酒の試飲会。

○ 夏: 旭岳登山&山頂ランチ、川遊び&地元産鮎の塩焼き、星空観察&地元産ワインのテイスティング。

○ 秋: 紅葉狩り&キノコ鍋ツアー、そば打ち体験&新そば試食、農家体験&収穫祭。

○ 冬: スキー&地元産チーズフォンデュ、アイスフィッシング&ワカサギの天ぷら、雪像づくり&温かい郷土料理。

③体験型イベントの開催

アウトドアフェスティバルやマルシェを活用

し、地域特産品の魅力を伝える様々な食体験を提供。地元シェフによる料理教室やデモンストラーション、多様なメニューが揃う試食イベントなどを開催し、観光客に地元食材を使った料理を学び、味わう機会を提供することで、東川町の食文化への理解を深め、地域経済の活性化を目指す。

・ イベント：

- 東川町フードフェスティバル：地元レストランや生産者による料理・特産品提供
- アウトドアクッキング教室：地元シェフによるアウトドア料理教室
- ファーマーズマーケット：地元農家による新鮮な農産物や加工品の販売

・ 体験プログラム：

- 蕎麦打ち体験：東川産蕎麦粉を使用、自然の中で蕎麦を味わう。
- 米粉パン作り体験：東川産米粉を使用、アウトドアオープンで焼き上げる。
- 野菜収穫体験：旬の野菜を収穫し、その場で調理、農家との交流。
- パーベキュー：地元産肉や野菜を使用、特製ダレでアレンジ、キャンプファイヤー。

・ 販売促進：

- マーケット出展：国内外の食のフェアや展示会に出展し、特産品を紹介、ビジネスチャンス拡大。
- オンライン販売：外国人向けECサイト開設、SNS等を活用した販売促進。

視点

次の3つの視点から具体的な取り組みの展開を目指す。

①文化交流の促進

- ・ 多文化交流クッキング：地元住民と観光客が共に料理を作るワークショップを開催し、食を通じた異文化交流を促進。レシピ交換や食文化に関するトークセッションなども実施。
- ・ 語学ボランティア活用：多言語対応のレシピや食文化解説を用意し、語学ボランティアを配置することで、言葉の壁を越えたコミュニケーションを支援。
- ・ ホームビジット：希望する観光客を地元住民の家庭に招き、家庭料理を共に作って食べることで、より深い文化交流を実現。
- ・ 食文化体験ツアー：地元の農家や生産者を訪問し、生産現場を見学しながら、食文化の背景にあるストーリーやこだわりを学ぶツアーを企画。
- ・ テーマ別イベント：地域の伝統行事や祭りに合わせた食のイベントを開催し、地域の文化を体験できる機会を提供。

②持続可能な地域経済の活性化

- ・ 地産地消レストランの推進：地元食材を積極的に活用するレストランを認定し、PRすることで、地域内での経済循環を促進。
- ・ 農家民泊の推進：農家に宿泊し、農業体験や地元料理を楽しむことができる農家民泊を推進することで、農家の収入源 diversification を支援。
- ・ 特産品開発支援：新たな特産品開発のための助成金制度や、専門家によるコンサルティングを提供することで、地域産業の活性化を図る。
- ・ 6次産業化の推進：農産物の加工・販売ま

で一貫して行う6次産業化を支援することで、付加価値を高め、農家の所得向上につなげる。

- ・オンライン販売プラットフォームの構築：地元特産品を販売するECサイトを構築し、販路拡大を支援。

③国際的な認知度向上

- ・多言語情報発信：地域の特産品や食文化に関する情報を多言語で発信し、海外からの観光客誘致を促進。
- ・国際的な食のイベントへの参加：海外で開催される食のイベントに積極的に参加し、東川町の食文化を世界に発信。
- ・海外メディアへのPR：海外メディアへの積極的なPR活動を通じて、東川町の魅力を世界にアピール。
- ・インフルエンサーマーケティング：海外の食に関するインフルエンサーを招待し、東川町の食文化を体験してもらい、SNS等で発信してもらう。
- ・姉妹都市提携：食文化に関連する海外の都市との姉妹都市提携を推進し、相互交流を通じて東川町の認知度向上を図る。

課題

本提案に関する課題について、以下にまとめる。

①情報発信の不足

- ・情報量不足：地元特産品の詳細な情報（生産方法、歴史、ストーリーなど）や、それらを使った料理を提供する飲食店の情報が不足している。ウェブサイトやパンフレットだけでなく、SNSや動画なども活用した情報発信が必要。
- ・ターゲット層別情報発信の不足：国内観光

客、外国人観光客、ファミリー層、若者層など、ターゲット層に合わせた情報発信が不足している。それぞれのニーズに合わせた情報提供が必要。

- ・アクセス方法の情報不足：特産品を購入できる場所や、食文化体験ができる場所へのアクセス方法の情報が不足している。公共交通機関、車、徒歩など、様々なアクセス方法を分かりやすく提供する必要がある。
- ・多言語対応の不足：外国人観光客向けの多言語情報が不足している。ウェブサイト、パンフレット、案内表示などの多言語化が必要。
- ・最新情報の欠如：イベント情報や季節限定商品の情報など、最新情報がタイムリーに更新されていない。

②言語の壁

- ・多言語対応スタッフの不足：食文化体験を提供する施設や飲食店に、多言語対応可能なスタッフが不足している。
- ・多言語メニューの不足：飲食店のメニューが多言語化されていないため、外国人観光客が料理の内容を理解しづらい。写真やイラスト付きのメニューも有効。
- ・多言語対応の案内表示の不足：観光施設や交通機関における多言語対応の案内表示が不足しているため、外国人観光客が目的地までスムーズに移動できない。
- ・通訳サービスの不足：必要に応じて通訳サービスを提供できる体制が整っていない。
- ・文化的な背景を考慮したコミュニケーション不足：外国人観光客の文化的背景を理解したコミュニケーションが不足している。

③品質管理と安全性

- 衛生管理体制の不備：特産品の生産、加工、販売における衛生管理体制が不十分である可能性がある。HACCPなどの衛生管理手法の導入が必要。
- 品質基準の明確化：特産品の品質基準が明確化されていないため、品質にばらつきが生じる可能性がある。統一的な品質基準を設ける必要がある。
- トレーサビリティの確保：特産品の生産から消費までの過程を追跡できるトレーサビリティシステムが構築されていない。
- 輸出に関する規制への対応不足：輸出を行う際の各国における食品衛生規制や検疫手続きへの対応が不十分である。
- アレルギー対応の不足：食物アレルギーを持つ観光客に対する情報提供やメニューの対応が不足している。

④マーケティングの強化

- ターゲット層の明確化：どのような観光客をターゲットとするのかを明確化し、それに合わせたマーケティング戦略を策定する必要がある。
- 魅力的なコンテンツ作成：特産品の魅力を伝える写真、動画、ストーリーなどの魅力的なコンテンツを作成し、ウェブサイトやSNSで発信する必要がある。
- 体験型プログラムの開発：料理教室、収穫体験、工場見学など、観光客が実際に体験できるプログラムを開発することで、より深く食文化に触れてもらう機会を提供する。
- 口コミ効果の活用：SNSや口コミサイトなどを活用し、観光客からの口コミを広げることで、認知度向上を図る。
- 他地域との連携：近隣の観光地や関連団体

と連携し、共同でプロモーション活動を行うことで、相乗効果を生み出す。

(3) 留学生を活用した次世代型の介護看護学校の取り組み

概要

東川町の旭川福祉専門学校を拠点に、増加する外国人留学生と将来の介護看護人材不足という社会課題を解決するため、留学生に特化した次世代型の介護看護教育を提供する。実践的なスキル習得、多文化理解、地域連携を重視し、質の高い介護看護人材育成を目指す。

ビジョン

グローバル化と高齢化が進む社会において、多文化共生に対応できる質の高い介護看護人材を育成する中核拠点となる。留学生の視点を取り入れた革新的な教育プログラムを提供し、地域社会の福祉向上に貢献する。

ターゲット層

- 介護看護分野に興味のある外国人留学生
- 日本語能力を有する、または学習意欲のある留学生
- 高齢者介護や地域医療への貢献意欲のある留学生
- 将来、日本で介護看護職として就労希望の留学生
- 母国での介護看護分野への貢献を目指す留学生

具体的な取り組み

①専門日本語教育と実践的スキル習得の融合

- ロールプレイング：介護現場で起こりうる様々な状況を想定したロールプレイングを実施。日本語でのコミュニケーション能力

向上、とっさの対応力の強化、異文化理解を深めることを目指す。例えば、認知症の利用者への対応、家族との面談、緊急時の対応などを想定したロールプレイングなどが考えられる。

- VR技術の活用：VR技術を用いて、よりリアルな介護現場を体験。様々な状況を安全に体験学習できることで、実践的なスキル習得を促進する。例えば、入浴介助、食事介助、移乗介助などをVRで体験し、手順や注意点などを具体的に学ぶことができる。
- 高齢者施設での実習：実際の高齢者施設での実習を通して、現場での実践的なスキルを習得。座学で得た知識を活かし、現場での経験を積むことで、即戦力となる人材育成を目指す。実習期間中は、施設職員の指導を受けながら、介護業務全般を経験することができる。

②多文化理解に基づいた介護看護教育

- 異文化理解ワークショップ：異なる文化圏出身の留学生同士が、互いの文化や価値観を理解するためのワークショップを実施。多様な文化背景を持つ人々と協働する能力を養うことを主眼とする。ワークショップでは、グループディスカッションやプレゼンテーションなどを通して、異文化コミュニケーションのスキルを習得。
- 多言語対応研修：介護現場で必要となる多言語対応能力を強化するための研修を実施。日本語以外の言語を話す利用者とのコミュニケーションを円滑にし、質の高い介護サービス提供を目指す。研修では、医療用語を

含む様々な場面での多言語対応について学ぶ機会を提供する。

- 事例研究：実際に起きた事例を基に、多文化背景を持つ利用者への適切な介護のあり方について検討。多様な価値観や倫理観を理解し、状況に応じた適切な対応を学ぶことを目指す。

③地域連携によるキャリア支援

- インターンシッププログラム：地域の医療機関や介護施設でのインターンシップを通して、実践的な経験を積む機会を提供。将来のキャリアプランを具体的に描き、就職活動に繋ぐ。インターンシップを通して、現場の雰囲気や仕事内容を理解し、自分に合った職場を見つけることができる。
- 就職説明会：介護関連企業や医療機関を招いた就職説明会を開催。求人情報の提供だけでなく、企業担当者と直接交流する機会を設けることで、就職活動を支援。
- キャリアカウンセリング：個別相談を通して、留学生一人ひとりのキャリアプラン策定をサポート。将来の目標や希望に合わせた就職先選び、就職活動に関するアドバイスなどを提供。

視点

①持続可能な介護看護人材育成システムの構築

留学生が安心して学習に集中でき、卒業後も日本で活躍できるような持続可能な支援システムの構築を目指す。

- 日本語教育の充実
 - レベル別クラス編成：日本語能力試験（JLPT）のレベルや、介護現場に必要な日

本語の習熟度に応じてクラスを分け、それぞれのレベルに合わせたきめ細やかな指導を行う。

- 介護専門用語の習得：介護現場で頻繁に使用する専門用語や表現を重点的に学習するカリキュラムを導入し、医療用語辞典の活用や、ロールプレイングでの実践練習なども取り入れる。

- 日本語学習サポート体制：学習面での疑問や不安を解消するための個別指導や、チューター制度による学習支援を実施。

- ・生活支援

- 住居確保の支援：留学生寮の提供や、民間アパートの紹介など、安心して生活できる住居の確保を支援。

- 生活オリエンテーションの実施：日本の生活習慣、ルール、マナー、公共サービスの利用方法など、生活に必要な情報を提供するオリエンテーションを実施。

- 生活相談窓口の設置：生活上の困りごとや悩みを相談できる窓口を設置し、多言語対応の相談員を配置。

- アルバイト情報の提供とサポート：学業に支障のない範囲でのアルバイト探しを支援するため、求人情報の提供や、面接対策などのサポートを行う。

- ・メンター制度

- 日本人学生との交流促進：日本人学生をメンターとして、留学生の学習や生活をサポートする制度を導入。

- 先輩留学生との交流：既に日本で生活している先輩留学生をメンターとして、経験やアドバイスを共有する機会を提供。

- 地域住民との交流：地域住民をメン

ターとして、地域社会への適応を支援。

②地域社会との共生

留学生が地域社会に溶け込み、地域住民との相互理解を深め、共に地域社会を活性化していくことを目指す。

- ・地域交流イベント：

- 国際交流イベントへの参加促進：地域で開催される国際交流イベントへの参加を促し、地域住民との交流の機会を創出。

- 留学生による文化紹介イベントの開催：留学生が自国の文化を紹介するイベントを開催し、地域住民に多様な文化に触れる機会を提供。

- 共同イベントの企画・実施：地域住民と留学生が共にイベントを企画・実施することで、協働の意識を高める。

- ・ボランティア活動

- 地域貢献活動への参加促進：地域の清掃活動や、高齢者施設でのボランティア活動など、地域貢献活動への参加を促進。

- ボランティア活動の情報提供とサポート：ボランティア活動に関する情報提供や、活動場所の紹介、参加手続きのサポートなどを行う。

- ・多文化共生に関する啓発活動

- 地域住民向けセミナーの開催：多文化共生に関するセミナーを開催し、地域住民の理解を深める。

- 多文化共生に関する教材の作成・配布：多文化共生に関する教材を作成し、地域住民に配布することで、啓発活動を推進。

- 地域メディアとの連携：地域新聞や地域情報誌など、地域メディアと連携し、多文化共生の重要性について発信。

課題

本提案に関する課題について、以下にまとめる。

①言語の壁

- 利用者との円滑なコミュニケーション：高齢者の中には方言を使う人や、認知症によってコミュニケーションが困難な人も存在する。留学生にとっては、標準語以外の日本語を理解することや、非言語コミュニケーションを読み取ることが難しい場合があり、利用者のニーズを正確に把握できなかったり、誤解が生じたりする可能性がある。
- 専門用語の理解：介護現場では、医療用語や介護専門用語が頻繁に使用される。これらの専門用語を理解していないと、適切な介護を提供することが難しく、医療事故につながる危険性もあり、また研修や会議などでも専門用語が使われるため、理解不足は学習の妨げにも繋がる。

②文化の違い

- 介護における価値観や倫理観の違い：国や文化によって、高齢者介護に対する考え方や価値観、倫理観は大きく異なる。例えば、身体接触の程度やプライバシーの捉え方、家族の役割など、文化差による認識の違いは、介護現場での摩擦やトラブルの原因となる可能性がある。
- 誤解や摩擦：文化の違いによるコミュニケーションの行き違いや、行動様式の違いは、留学生と利用者、あるいは留学生と職員の間で誤解や摩擦を生む可能性がある。例えば、アイコンタクトの頻度や、直接的な表現の有無など、些細なことが誤解につながる可能性も考慮する必要がある。

③経済的な負担

- 留学費用：入学金、授業料、教材費など、留学には高額な費用がかかるため、留学生にとっては、経済的な負担が大きく、留学を断念せざるを得ない場合も考えられる。従って現在運用している奨学金の拡充などが求められる。
- 生活費：家賃、食費、光熱費、交通費、通信費など、日本での生活には様々な費用がかかる。現在、円安ではあるが、物価の高い日本では、留学生にとって生活費の負担は大きな課題でもあり、経済的負担の軽減策が必要である。

④就労支援

- 卒業後の就労先確保：介護業界は人手不足と言われていますが、留学生にとっては、日本語能力や文化の違いなどから、就職活動が困難な場合がある。卒業後に日本で就労を希望する留学生にとって、就労先の確保は大きな課題である。
- ビザの問題：留学生が日本で就労するためには、適切なビザを取得する必要があるが、ビザの取得には、様々な条件があり、手続きも複雑である。ビザに関する情報不足や、手続きの煩雑さは、留学生にとって大きな負担であることから、十分に支援が求められる。
- 就職活動の情報不足：日本の就職活動の慣習や、求人情報の入手方法など、留学生にとって必要な情報が不足している場合がある。効果的な就職活動を行うためには、適切な情報提供とサポートが必要です。

⑤教育体制の整備

- 留学生を受け入れるための教育体制の不足：

日本語教育や異文化理解教育、生活支援など、留学生を受け入れるための教育体制が十分に整っていない場合があるため、教育体制の拡充が必要である。

- 教員の不足：留学生への日本語教育や介護看護の専門教育を行うための、適切な知識と経験を持つ教員が不足している場合があり、人材の確保は重要である。
- 教材の不足：留学生向けの日本語教材や、

多文化共生に関する教材など、必要な教材が不足している場合があり、適宜教材を見直すことも必要である。

- 学習支援体制の不足：留学生の学習をサポートするための、チューター制度や学習相談窓口など、学習支援体制が必ずしも十分ではない場合があるため、必要に応じて支援体制の見直しも重要である。

Glocal Design Proposal: Higashikawa Town

Masakazu Watanuki, Ph.D
President, Japan Global Initiative

Abstract

Higashikawa Town, located near the center of Hokkaido, is a town with a population of approximately 8,600, blessed with beautiful natural surroundings and abundant tourism resources. It enjoys convenient access, being about 13 km from central Asahikawa City and roughly 7 km from Asahikawa Airport. The Eastern part of the town is a mountainous region with vast forested areas, including Daisetsuzan National Park, Japan's largest national park, which features Asahidake, the highest peak in Hokkaido.

The snowmelt from the Daisetsuzan mountains takes many years to become groundwater, supplying the town at its base. As a result, Higashikawa is the only town in Hokkaido—and one of the few in Japan—without a public water supply system. The town has also declared itself the "Town of Photography" and the "Capital of Photographic Culture," actively promoting community development through photography.

In recent years, an increasing number of people from across Japan have relocated to Higashikawa, leading to a rise in cafés, specialty shops, wineries, vineyards, and sake breweries. This has also attracted a growing number of young tourists.

Higashikawa is a unique town with its own distinctive culture, known as the "Higashikawa Style," which values authenticity. It is also one of Japan's few highly diverse communities, with a significant number of foreign residents. Guided by the principle of "appropriate sparsity" (tekiso), the town pursues sustainable regional development while embracing a forward-thinking approach. Leveraging its distinctive local climate and rich resources, Higashikawa continues to pioneer innovative initiatives, making it an advanced town that embraces future challenges.